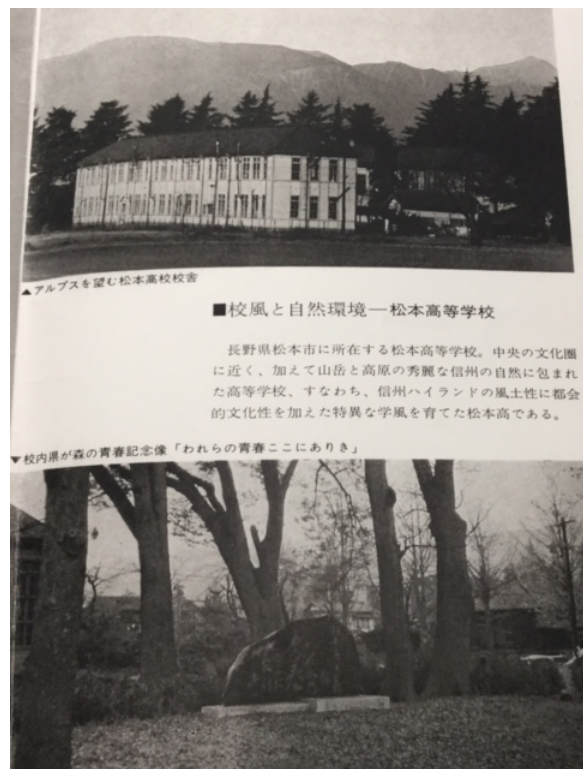


## 旧制松高と『どくとるマンボウ青春記』

東京一ツ橋の日本教育会館会議室で講演した。それについては、またレポートしたい。初めての会場であり、早めに着いたので、たまたま見つけた5階にある「教育図書館」に行ってみた。教育関係の貴重な図書が数多く並んでおり、短時間ながら資料のページをめくった。その中に『資料集成 旧制高等学校全書』があった。八高をはじめ、旧制高校に興味があり、その第4巻（1981年）に旧制松高の写真を見つけた。写真にはアルプスを望む松本高校校舎とある。下の写真には校内県が森の青春記念像「われらの青春ここにありき」と書かれている。

この松高校舎には、懐かしい思い出がある。信州大学人文学部の学生だった頃、この校舎でも義を受けたことがある。木造2階建ての校舎であり、なかなか風情があった。凍てつく松本なので、教室の燃えにくい薪ストーブに火をつけ、講義に備えたものだ。

松高といえば、北杜夫『どくとるマンボウ青春記』を想起す。北さんは2011年に亡くなったが、「追悼 北杜夫」という帯がついた新潮文庫の表紙カバーには、次のように記してある。「18歳のマンボウ氏は、バンカラとカンゲキの旧制高校生活で何を考えたかー。個性的な教師たちと大胆不敵な生徒たちが生み出す、独特の熱気と喧騒に身をまかせながら、ひそかに文学への夢を紡いでいったかけがえのない日々は、時を経てなお輝き続ける。爆笑を呼ぶユーモア、心にしみいる抒情、当時の日記や詩も公開、若き日のマンボウ氏がいっぱいにつまった、永遠の青春の記録」



本書にも出てくる寮歌などの一部を紹介しておこう。

嗚呼青春の歎喜より            はえの力は生れ出でて            燦爛高き天の座に  
生命の群のわななけば            聖歌を聞くやえのきばの            木梢に星は瞬きぬ

「春寂寥の洛陽に 昔を偲ぶ唐人の 傷める心今日は我……」という『春寂寥』や、「夕暮るる筑摩の森をそぞろ行く……」という『夕暮るる』などのもの悲しい逍遥歌もあり、こうした独唱がかすかに枯野の涯からひびいてくると、胸がじいんとしてくるのだった。

(2015年10月19日)